

自主を促す工学技術者キャリア教育 最終成果報告会

日時：平成24年3月21日(水)13:00-14:30

場所：工学部 B101講義室

プログラム：

司会進行： 特任教授 平野 公孝

(1)開会挨拶(13:00-13:10)

工学部長 今井 富士夫

(2)取り組み成果報告(13:10-14:30)

1)キャリア支援システムの構築と運用

2)工学技術者知識講座

3)コミュニケーションスキル講座

4)工学デザイン実習

5)企業インタビュー

6)取り組みの成果と今後の展開

主催：工学部教育改革推進センター
キャリア教育事業推進委員会

自主を促すキャリア教育外部評価委員会 議事要旨

日時：平成24年3月21日（水）14：40－15：30

場所：工学部大会議室

出席者：

【外部評価委員】

宮崎県工業技術センター副所長 富永 宏文

宮崎県工業会専務理事 川井 徳之

アイコムティ株式会社社長 水居 徹

【大学側出席者】

学部長 今井 富士夫

副学部長（教務担当） 横田 光広

キャリア教育事業推進委員会

委員長 古谷 博史，副委員長 松下 洋一（教育改革推進部門長）

委員 酒井 剛（FD部門長），佐藤 治（キャリア支援部門長），迫田 達也（インターンシップ部門長），白上 努（物環），迫田 達也（電電），関戸 知雄（土木），坂本 真人（情報），相川 勝（教育研究支援技術センター），大塚 浩史（第3条(5)の委員）

教育改革推進センター教育改革推進部門

委員 大塚 浩史（材物），冨田 重幸（情報）

特任教授 平野 公孝（特任教授）

事務担当 日高 敦子（教育研究支援室キャリア教育担当）

【議事】

古谷 キャリア教育事業推進委員長が議事進行を勤めた。

1. 学部長挨拶

工学部長より工学部の教育改革の取り組み状況を含めてキャリア教育事業の位置づけの説明があった。

2. 自己点検評価書の説明

キャリア教育事業推進責任者 松下 より自己点検評価書に従って、各取り組みの自己点検評価内容の説明があった。

3. 質疑応答

外部評価委員からの取り組み内容についての質問に各取り組みの担当者が回答した。

4. 外部評価委員の総評コメント

委員からそれぞれ総評コメントがあった。また、各委員から取り組み項目と全体に関する評価数値とコメントを記入シートに記入して送付してもらうことになった。これらを自己点検評価書と合わせた外部点検評価書にまとめることになった。

以上

平成21～23年度大学教育推進プログラム 自主を促す工学技術者キャリア教育事業 自己点検評価書および外部評価書

評価数値 IV:目標・計画を超えて実施できた III:目標計画通りに実施できた II:目標・計画よりかなり低い実施である I:目標・計画をほとんど実施できていない

教育目標	取組項目	時間帯区分	取組計画	計画の実施状況, 評価および課題		評価数値	外部評価委員3人の判定(平均)およびコメント	外部評価を受けての今後の改善予定
				①計画の実施状況及び評価数値の判断理由	②計画に対する今後の課題、問題点、改善点			
1 自主学習意欲向上 <1.体系的な教育課程—学習意欲の喚起, 14.GPA, 16.初年度教育>	①-1 ライフ・プランニング・シート(新規)	正課	「日本語コミュニケーション」の中で, 自分の将来を考え, 学習設計する。クラス担任による学生個別指導の機会に見直し, 学習目標・計画の立案に役立てる。	最終的にシート名称を“キャリアプランシート”にした。シートを試作し, 平成22年1月1回目, 平成22年2月に2回目の学生による記入試行を行ってもらった。そのアンケートに基づいて, シート様式を改良し, 平成23年9月の工学技術者知識講座で3回目の試行を行った。さらに改良してシート様式が決まったので, 平成24年3月のSCEホームページの更新時にファイルをアップロードする。当初計画より若干の遅れがあるが, 目標に近い取り組みを行えた。	ホームページのキャリアプランシートを使って, 全学科で使用するのは平成24年4月以降になる。	Ⅲ	評価数値:Ⅲ コメント: ・アンケートには, 自分自身を見直す良い機会であったなどのコメントがあり, 好意的に受け止められている。 ・シートの改変により充実できた。常に学生自身がこのシートを活用する工夫を。	キャリアプランシートの利用促進をホームページ等で宣伝する。
	①-2 学習目標達成度自己評価シート(改良)	正課	毎学期の終了後に「学習成果評価会」を学年ごとに開催する。各履修科目の自己成績評価と学習改善を学生自身が自己評価・記入したシートを提出させる。	各学科が日本技術者教育認定機構(JABEE)教育プログラムで学習目標達成度自己評価シート(紙媒体)で学期毎に学生に記入させてきた。平成23年度に各学科のシート様式を調査した。調査結果に基づいて, この機能を実現するシステムプログラム“履修カルテシステム”の開発を行った。システム化に成功し, 学部として統一して入力できる体制が整ったので, 目標・計画を超えて実施できたと判断する。	平成24年4月から本格運用に入るので, 改善点の抽出は次年度実施となる。	Ⅲ	評価数値:Ⅲ コメント: ・自己評価システムを開発できたことは評価する。 ・系統的に「こなれている」と感じた。評価できる。	履修カルテシステムの利用説明会を平成24年5月以降に各学科・各学年クラスで行い, 利用促進を図る。
	①-3 クラス担任のGPAに基づく履修指導(改良)	正課	クラス担任は1年に1回学生との個別指導機会を持ち, ①-1や①-2で実施のシートを参考として, GPAの成績資料に基づいた履修指導を行う。	既にGPAの集計シート(紙媒体)で学期毎にクラス担任に配布され履修指導に用いる仕組みは実施されてきた。しかし, 紙媒体で配布時期の遅れが問題であった。このため, 平成23年度に構築した“履修カルテシステム”にGPA計算・表示機能を組み込んだ。学部として一体的に使用できる体制が整えられたので, 目標計画通りに実施できたと判断する。	クラス担任が履修カルテシステムのGPAにより履修指導した実績の調査が次年度課題となる。	Ⅲ	評価数値:Ⅲ コメント: ・GPAの評価は低くても単位さえ取得すればいいと思う学生をどう奮起させるかが今後の課題であろう。 ・WEBベースで, 学生が外部からも入力閲覧できるのが好ましい。	GPAの重要性について, クラス担任教員等から説明する機会を持つ。

教育目標	取組項目	時間帯区分	取組計画	計画の実施状況, 評価および課題		評価数値	外部評価委員3人の判定(平均)およびコメント	外部評価を受けての今後の改善予定
				①計画の実施状況及び評価数値の判断理由	②計画に対する今後の課題、問題点、改善点			
2 課題探求能力・デザイン能力育成 <16.初年次教育, 2.幅広い学び-基礎力, 9.TA>	②-1 基礎物理学実験・基礎化学実験(改良)	正課	“Back to the basic”理念に基づく実験基本操作の学習を目指し実験を改良およびビデオ教材作成などを行う。TAが個別の実験指導補助をする。	基礎物理学実験では、同じ実験テーマを複数の班で行えるように改良し、各チーム間で議論しながら実験を進める課題解決型の授業方法への改善を図った。基礎化学実験でも主に中和滴定の実験内容を学生が自発的・能動的に行えるように工夫した。また、TAを活用し、基本的な実験操作(中和滴定法等)のビデオ教材を作成し、学部内にWebにて公開している。平成21年度に試行を行い、シラバスを改訂し、平成22、23年度に本格的に実施した。取組計画で挙げられた内容は確実に実施していると判断する。	このような基礎系の実験科目は各学科共に受講者数が多いため、今後一層、実験装置および実験器具、ならびにTA予算の充実化が必要になる。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・ビデオやコンピュータによるシミュレーションは教育でさらに必要と思われる。	学生が主体的に取り組める実験になるように今後も改良に取り組む。
	②-2 専門実習・実験(改良)	正課	現行の実験・実習をさらに体系的に工学技術習得でき、かつ課題探求・問題解決能力を伸ばす実験内容に改良する。TAが個別の実験指導補助をする。	全学科ともに、自学科で開講する専門実験科目の内容について、課題解決能力およびプレゼンテーション能力の向上を共通のテーマとして一部の実験内容を改良した。主に、実験装置や実験器具の充実化を図り、これまで多数で取り組んできた実験内容を少数で取り組めるような工夫をした。また、TAの事前教育も十分に行い、実験補助にあたらせた。取組計画で挙げられた内容は確実に実施していると判断する。	実験内容に関して大幅な改良がなされたので、今後教育効果についてのPDCAサイクルを実行しながら継続することが重要となる。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・核磁気共鳴やリンの分光分析実験など専攻科目に興味を持たせるようなテーマであり、受講者の評価も高かったのではないかと思う。	改良点についての教育効果の検証を各学科で行う。
	②-3 工学デザイン実習(新規)	正課外	綿密な実験・実習のテキストは用意せず、テーマ・材料のみを提示し、チームで試行錯誤して問題解決し、体験的に工学技術センスやイメージを磨かせる。工学への意欲や専門技術の大切さを実感させる。学生は所属学科以外のテーマを選んでよい。この実習を体験した4年生がSAとして実験指導補助をする。	平成21年度に3テーマ、平成22年度に6テーマ、平成23年度に7テーマで実施した。学生が学科を超えて一緒に学習する面白い試みであり、参加者にも好評な取り組みであった。ほぼ目標計画通りに実施できたと判断する。	それぞれの実習への参加者数は不十分であり、開催時期を見直す等、参加者を増加するための工夫が必要がある。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・学生のアンケートでも高い評価を得るなど当初のねらい以上の効果があったのではないかと。ただ、参加者がもう少し増えるといいのだが。 ・参加者の増加する工夫がさらに必要。 ・学生に自由な発想で考えさせる良い実習だと考える。学生には他人と違う考え方を養って欲しい。	参加者の増加に向けて、開講時期や実施方法の工夫を検討する。今年は夏休み前半での開講を試みる。

教育目標	取組項目	時間帯区分	取組計画	計画の実施状況, 評価および課題		評価数値	外部評価委員3人の判定(平均)およびコメント	外部評価を受けての今後の改善予定
				①計画の実施状況及び評価数値の判断理由	②計画に対する今後の課題、問題点、改善点			
3 工学センスの育成および企業等での実体験 ＜1.体系的な教育課程－キャリア教育の位置付け＞	③－1 長期インターンシップ(改良)	正課	修士課程学生を対象とした長期インターンシップを、4学生にも拡大する。卒業論文研究着手者で、かつ修士課程進学希望者とする事で、卒業論文研究への影響を抑えて修士課程への継続を可能にする。	長期インターンシップを平成22年度に学部4年生1件、平成23年度に大学院修士学生5件、学部4年生1件実施できた。 参加した学生の意識は高く、相手先企業で多くの事を学習できたようであった。特に、大学よりも意識のレベルの高い職場環境での安全に対する配慮、倫理感については、効果的に学習できるようであった。報告会では企業のから多くの賛辞を頂いた。 取り組み目標である社会性・人間性の教育と専門性の教育に対し、どちらも十分に目標を達成したと判断した。	実施までに至らなかった長期インターンシップがあったので、企業ニーズと学生の希望のマッチングの難しさやインターンシップ現場での事故・障害に対する企業の不安などの問題点が抽出できた。 長期間の準備時間が必要のために、参加時点で戻込みする学生が多い。キャリアアップや就職に有利なことを学生に強くアピールしていく必要がある。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・長期インターンシップは学生だけでなく受入側の負担も大きいということなので、2～3週間の短期ではどうだろうか。 ・相手先企業の情報や行なった業務などを公開すると参考になると学生や企業にとっても有効と思われる。 ・実績はまだ少ないが着実に成果を出している。企業サイドへの働きかけを今後共、民間を活用して積極的に展開して欲しい。	平成24年度から長期インターンシップを各学科の正規カリキュラムに取り入れている。年次進行に伴って、実施の制度を改善して整える。
	③－2 卒業研究テーマ募集による卒業研究(改良)	正課	従来から実施している。実績件数が減少傾向にある問題を、工学部教員の技術シーズをPRして提案課題とのマッチングを図ることで改善する。	平成20年に工学部と県内企業との間で産学連携包括協定を締結されて以降、幾つかの卒業研究テーマが実施されている。継続実施はされているものの、本取り組みで改善を積極的に行っていないので、達成度は低い。 [根拠] ・宮崎大学トピックス_公募による卒業研究テーマ発表会を開催 ・応募による卒業研究応募案内	平成22年度から高等教育コンソーシアム宮崎で実施される取り組みへと発展している。	Ⅱ	評価数値: Ⅱ コメント:	全学の実施状況について、工学部から改善要望を行う。
4 社会・企業でのコミュニケーション能力開発	④－1 エグゼクティブ・プロフェッション・インタビュー	正課外	希望学生でインタビュー・チームを編成する。チームで企業活動や技術者の仕事についてのインタビューを実施し、内容をレビュー記事にまとめ、キャリア情報冊子やホームページで情報発信を行う。	参加した学生からはとてもためになったとの感想が寄せられた。また、外部評価委員会で行った実施発表会およびその様子をe-ラーニングシステム“メディアサイト”で収録してストーリーミングコンテンツとして配信し高い評価を得た。 平成22年度において、学部2年生を対象に合計3チーム(男子6名、女子6名)を編成し、企業インタビューを実施した。各チームにそれぞれアドバイザーとなる教員を配置した。インタビュー企業の決定、インタビューマナー講座の開催、各企業でのインタビューの順で実施し、外部評価会にて外部評価委員の面前で成果報告会を実施した。各企業でのインタビューおよび成果発表会の様子はSCEのHPにて情報発信している。取組計画で挙げられた内容は確実に実施していると判断する。	長期間の準備時間が必要のために、参加時点で戻込みする学生が多く、参加者を募るのが非常に難しかった。そこで、平成23年度には、同じようにコミュニケーションカやプレゼンテーション能力が測れる実習講座を開催し、インタビューは取りやめることにした。 参加した学生にとっては、大変有意義な企画であったが、アドバイザー役の教員の負担も大きかった。また、参加学生の人数が少ない点も課題として残った。しかし、外部委員からの評価は高かったため、定常的に協力してもらえる企業先の探索等を行い、今後継続する方向で計画している。	Ⅲ	評価数値: Ⅱ＋～Ⅲ コメント: ・事前準備が大変であることは理解できる。 ・やはり毎年の実施が望ましいのでは？ ・学生が直接インタビューすることでスキルアップに繋がっており評価できる。引き続き企業に協力を働きかけていただきたい。	企業インタビューの実施について、採用のために本学に来学される企業担当者に協力を仰ぐなど、実施の方法について再検討する。

教育目標	取組項目	時間帯区分	取組計画	計画の実施状況, 評価および課題		評価数値	外部評価委員3人の判定(平均)およびコメント	外部評価を受けての今後の改善予定
				①計画の実施状況及び評価数値の判断理由	②計画に対する今後の課題、問題点、改善点			
	④-2 コミュニケーション・スキル講座	正課外	コミュニケーション・スキルを磨き、プレゼンテーション能力を育てるために、少人数・実体験型の研修で実習を行う。	コミュニケーションスキルの講義と実践を体験・習得できるプログラムとして、平成22年度及び23年度に課外講座「課題解決に役立つコミュニケーションスキル」が開催された。これは、修士学生を対象としたものであったが、少数であるが学部学生も積極的に参加し、実習を行った。ほぼ目標計画通りに実施できたと判断する。	課外講座への参加者数が、予想より少数にとどまった。コミュニケーション・スキルアップの必要性からすると、課外講座の開催時期をはじめ参加しやすい工夫をすることが重要である。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・コミュニケーション・スキルは就職してからも研修棟で実施されるほど重要なものであるため、受講者が増加するよう工夫して欲しい。 ・コミュニケーションスキルはますます重要になるので有益な講座	コミュニケーション・スキルについて学ぶ機会を、正課カリキュラムと正課外取り組みの両面から充実することを検討する。
5 優れた基礎力を身につける学習支援 <16.初年次教育, 2.幅広い学び-基礎力, 9.TA>	⑤-1 推薦入学者への入学前教育	正課外	推薦入学合格者に対して、数学の学習課題を与え、解答紙を添削して返却する入学前教育を実施する。	推薦入学者へ数学などの入学前学習教材を送付して添削による教科学習を行った。昨年度までの添削による教科学習で4回に分けた添削課題回収を行っていたのを改め、ほぼ同じ期間を3期に分割し、3回の送付・添削のやりとりで、推薦合格者95人全員を対象として実施した。本添削作業は、単に推薦合格者の課題の添削・返却ができたことに留まらず、添削者にとっても、他人とのコミュニケーションをどのように取るべきか、と学ぶ機会を作ることができた。目標計画通りに実施できたと判断する。	添削については、安定した運営ができる方法が確立しつつある。予算獲得を含め運営を継続する努力が、本工学部の問題として問われると思われる。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: 取組は順調に進められていると評価するが、受講者の感想を聞いてみたい。	受講者の意見をアンケート等で聴取してみる。
	⑤-2 補習授業の強化	正課	推薦入学で入学した学生について、数学と物理の未学習部分をそれぞれ1クラスで補習授業しているため、参加者が50名以上になり教育効果に限界がある。クラス数を増加し、学習レベル別のクラス分けで補習授業を強化する。また、化学でも実施する。	計画に従って以下の補習授業が実施され、補習による基礎学力を底上げできたので、目標計画通りに実施できたと判断する。 ○数学補習授業(5月から6月にかけて6コマ): 延べ156人(各回平均26人) ○物理補習授業(5月から7月にかけて10コマ): 延べ151人(各回平均15人) ○数学自主勉強会(4月から1月各学科毎週実施計85コマ): 延べ640人(各回平均7.5人) (注. 概ね2学科について1クラス、計週4クラスを編成)	補習授業の今後については、基礎教育委員会と新設される工学基礎教育センター専任予定教員の間で検討し、入試制度の変更(前期入試は物理・化学・数学の中から選択)も鑑み、次年度以降は通常授業における未習者対策を強化して補習授業は廃止し、自主勉強会に類するものを実施する計画を立てている。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・未習者は学習の機会が与えられなければ講義について行けないおそれがあるので、何らかの対応をお願いしたい。	今後とも補習教育を継続して実施する。
	⑤-3 数学、物理、化学などの自主学習グループ形成	正課外	工学部共通の基礎専門科目(数学、物理、化学)を好きで深く探究したいと考える学生を募り、自主学習グループを形成する。教員とTAが学習を深める相談役・指導役として係わり、優れた基礎力を育成する。	平成22年度に数学と化学(教職実習、環境化学)で実施した。平成23年度も数学と環境化学で実施できた。ほぼ目標計画通りに実施できたと判断する。	参加人数を増加させることが今後の課題になる。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・資格取得のための学習とからめて実施すれば参加者が増えるのではないかと。目標が無いとなかなか参加しないと思う。 ・参加人数が課題	資格取得講座と絡めた自主学習グループを増やす検討を行う。

教育目標	取組項目	時間帯区分	取組計画	計画の実施状況, 評価および課題		評価数値	外部評価委員3人の判定(平均)およびコメント	外部評価を受けての今後の改善予定
				①計画の実施状況及び評価数値の判断理由	②計画に対する今後の課題、問題点、改善点			
6 自主学習で職業人に必要な知識・能力取得—専門知識・技術以外に必要な社会性や責任感を育成	⑥-1 工学技術者知識講座・講義(環境, 安全, 倫理の学習教材開発を含む)	正課外	専門知識・技術以外で技術者に必要な法令遵守, 倫理, リスク管理, 環境保全, コミュニケーション能力などを地域企業から招聘した講師による課外講座で, 社会性や責任感を育てる。1回2時間の講座とする。	平成22年度に1講座, 平成23年度に2講座, 平成23年度に2講座を開講できた。学生の参加者も毎回かなり多く, 目標計画通りに実施できたと判断する。	今後も継続して取り組むためには, 講師経費の確保が必要である。県外でなく, 県内企業からの講師を増加させる必要がある。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・県内のOBなどをお願いすれば無償で来てもらえるのではないかと。 ・県内企業とのコラボは必要と思われる。	大学のOB, 宮崎県工業会などの団体および県内各企業へ連携協力をお願いする。
<1.体系的な教育課程—地域教育資源活用, 2.幅広い学び—21世紀型市民自立・学生の自主, 12.情報通信技術>	⑥-2 工学技術者知識講座・野外体験研修	正課外	企業研修として行われる野外体験型の研修を学生にも体験させ, チークワークやコミュニケーションの能力を高める。	旭化成アマダス(株)と連携して, 野外体験型研修(ビジネスシミュレーションラリー: BSR)が, 平成22年度及び23年度に実施された。これは, 企業人対象の研修を全国でも初めて大学生に適用したもので, マスコミ等でも大きな注目を浴びた。参加者の反応もきわめて好評であり, 研修目的が十分に達成された。	BSRの実施には, 経費の確保が重要である。今後の継続的实施には, 対象学生を全学に広げてその教育効果を確認し, 全学的な財政的支援を整える必要がある。	Ⅳ	評価数値: Ⅲ~Ⅳ コメント: ・ゲーム感覚で参加できるので受講しやすいし, 受講者の評価も非常に高いので, 継続の努力をお願いしたい。 ・受講者が得たものは大きかったのではないかと。 ・継続して実施いただきたい。 ・野外体験型研修は, 今の学生気質にうまくマッチしている。コミュニケーション・ツールとしても今後の継続的な取り組みに期待したい。	実施費用の確保が重要で, 長期的な視点で継続できるかを検討し判断する。
	⑥-3 e-ラーニング学習システム	正課外	平成22年度より学生へのパソコン必携化による授業への活用を計画する。既に英語学習および一部の専門授業教材をe-ラーニングシステム運用している。今後, 他の外国語学習システムや多数の授業での教材化を進め, 自宅での自主学習を支援する。	平成21年度にe-ラーニングシステム“メディアサイト”を購入して, 工学技術者知識講座他をビデオ撮影して, ストリーミングコンテンツとして充実してきた。平成23年度には「工学技術者知識講座をe-ラーニングシステムで視聴して, 講演のレポートを提出すると, 『e-ラーニング工学技術者知識講座』を修了したと認定して, キャリア・ディベロップメント証明書に記載する」として利用者の拡大を図る運用を始めた。ほぼ目標に近い取り組みを行えた。	システムの保守管理費用の確保と利用者拡大が今後の課題である。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・利用率を公開してはどうか。	利用率の公開について年度ごとに学生に公開して, 利用意識を高める。
7 自主学習で職業人に必要な知識・能力取得—専門知識を生かしたキャリア形成	⑦ 資格取得支援公開講座	正課外	学生からのニーズが多い資格試験の自発的学習の支援を目的に, 資格取得支援講座を開催する。年間数講座以上を開講する。	学生の国家試験受験の意欲は高く, 資格取得支援講座の開催は学生の学習ニーズに応えるもので, 毎回20名程度の参加があった。実施の意義は大きく, 学生のキャリアアップのための学習を自主的にできる機会を増やせたものとする。目標計画通りに実施できたと判断する。	アンケート結果においては, 非常に好意的な意見とともに評価の高い回答を確認することができた。また, “もっと時間を増やして欲しい”とのコメントもあった。時間数や開講日を工夫して, 今後も継続していきたいと考えている。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ~Ⅳ コメント: ・就職状況の厳しい中, 資格を所持していることは有利であるので今後も続けて欲しい。 ・成果が見えていることでもあり評価できる。	産学・地域連携センターと協力して, 資格取得講座を開講する学科を増やす努力をする。

教育目標	取組項目	時間帯区分	取組計画	計画の実施状況, 評価および課題		評価数値	外部評価委員3人の判定(平均)およびコメント	外部評価を受けての今後の改善予定
				①計画の実施状況及び評価数値の判断理由	②計画に対する今後の課題、問題点、改善点			
8 自主学習の動機付けおよび就職でのキャリア自己PRの支援 <2.幅広い学びー自主学習履歴・能力証明>	⑧ キャリア・ディベロップメント証明書	正課外	キャリア・ディベロップメント証明書が学生の自主的な学習を促し, 継続させるドライビング・フォースになる。学生生活の中で自主的努力をした知識や能力の習得の軌跡を, 学部の証明書として発行する制度で, 就職・進学時に証明書添付により活用する。	平成22年度にシステム機能についてキャリア教育事業推進委員会で検討し, 平成23年3月にキャリア・ディベロップメント証明書発行システムを完成させた。SCEプログラムの取り組み開始から3年目の平成23年度から3年生を対象にキャリア・ディベロップメント証明書を発行できる段階に入った。企業の就職対象者に下のようなキャリア・ディベロップメント証明書についてのアンケートを実施した。目標計画通りに実施できたと判断する。	キャリア・ディベロップメント証明書が大学の中に学生が行った自主活動実績を証明するものとして採用企業に認知されるような取り組みが今後の課題である。	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・我が身を振り返っても、この欄に記載する事項のない学生が多いのではないかと思うがどうか。そうであれば、活用されることも無いということになるが・・・。 ・すばらしいシステムとなっている。企業側へのさらなるPR、広報活動が重要。 ・自己PRを客観的に表現し、自己確認できるGoodシステムである。今後の拡大活用に期待したい。	証明書記載事項を増やす努力が必要なことを学生に認識できるように広報する。学生の保護者にも取り組みを伝えるため取り組みパンフを配布して説明する。企業へも「証明書発行」の取り組みをPRすることを継続する。
9 教員のキャリア教育担当能力向上 <18.FD>	⑨ 教員のキャリア教育担当能力を向上するFD研修		キャリア教育に関連するFD研修会を年間3回開催する。	教員のFD研修会として、技術者倫理にかかわるテーマで、平成21～23年度に各1回「専門職・技術者倫理ワークショップ」が開催した。更に、キャリア教育に関するテーマでのFD研修会も開催した。目標計画通りに実施できたと判断する。	継続的なFD研修会が開催されている。しかし、更に多数の教員の参加をうながすために、魅力あるテーマの設定等の工夫が必要である。	Ⅲ	評価数値: Ⅱ～Ⅲ コメント: ・更に多数の教員の参加をうながすために、魅力あるテーマの設定等の工夫が必要である。	教育改革推進センターFD部門で研修会内容の検討と企画を行う。
9 学生および教職員の教育支援 <20.その他>	⑩ 非常勤の教員と事務補佐員を雇用		工学部教育研究支援室の人員を増やし、キャリア・ディベロップメント証明書のためのデータ収集蓄積と証明書発行業務およびプログラム推進事務を担当させる。	教育研究支援室に事務補佐員(H21年度2人, H22・23年度1人)を採用して、キャリア・ディベロップメント証明書発行の業務と予算管理等の事務を担当してもらった。また、非常勤の特任教授1人をH22・23年度に雇用し、取組の企画・推進に当たってもらった。計画通りに実施できた。	特になし	Ⅲ	評価数値: Ⅲ コメント: ・継続してこの「システム」を推進してもらいたい。	教育研究支援室の事務補佐員により、今後も事業推進の事務補佐を実施する計画である。

外部評価委員による事業全体の評価および総括コメント

評価数値

IV: 目標・計画を超えて実施している III: 目標計画通りに実施している II: 目標・計画よりかなり低い実施レベルである I: 目標・計画をほとんど実施できていない

外部評価委員 の評価数値	III～III+
総括コメント	<p>(富永委員) 評価数値 III 学生の資質向上・学習意欲向上のために様々なプログラムを用意するなど努力されていることは評価しますが、いずれの取組も参加者が予想より少なかったのではないかと思います。 各項目の自己評価にもあるように参加者を増やすため、学生の意欲をかきたてるような、魅力的な取組となるよう、より一層工夫していただきたいと思ます。</p> <p>(水居委員) 評価数値 III+ 二年目の報告では未達成な要素もうかがえたが、三年目の報告ではかなりの部分で達成されていると判断しました。この活動自体のPR広報をさらに積極的に取り組まれるとよいのではないのでしょうか。ソーシャルメディア等新しいメディアの活用も必要と思ます。</p> <p>(川井委員) 評価数値 III これをベースとして今後さらなる充実に期待したい。学生と企業では、コミュニケーション能力についてのとらえ方に大きな開きがある。このギャップを埋める工夫をこの教育プログラムで達成していただきたい。</p>

外部評価委員会でのコメント(質疑応答は省略しています)

富永	学生の質の向上の取り組みに努力されていることがよくわかった。取り組みへの学生の参加者が少ない点が気になる。参加者増加の努力を是非願います。
水居	<p>コミュニケーション力アップは必要と感じる。最近の企業では新入社員研修をOff-JTで行わず、直接現場に入れてOJT研修で行うところが多くなり、新入社員が孤立して5月病になるケースが多いと聞く。実際、私が非常勤講師で教えている有名私立理工学系でも、学生はほとんどが企業の研究開発職になるらしいのですが、就職後早期に退職してしまうケースが目立つとのことである。コミュニケーションの取り方を身につけさせる教育が必要だが、どのような方法をとるかは工夫がいる。大学ではチーム体験などのアナログ的な手段を実施されているが、ソーシャルメディアを活用するののも一方法と思う。フェイスブック等を利用したコミュニケーションの横の広がりには目を見張るものがある。これらをうまく利用する方法がないか考えてみてはどうか。自治体でも新富町メディア王国構想など活用を図るところがある。ロータリークラブや経済同友会などで高校や大学と協力した活動が行われているので、これらの組織とコラボするのは有効である。講演会などにかかる経費を少なくする意味からもよいと思われる。</p> <p>昨年度の報告を受けたときは、かなり未完成の取り組みがあると危惧していたが、目標達成に向けた努力がなされ、最終報告では努力の成果が感じられた。参加者をいかに集めるかは今後さらに工夫してほしい。外部に取り組みをアピールすることが重要です。もっと広報に取り組み、ニュースなどに取り上げれば、学生が逆にニュースを見て取り組みに興味を持つようになることがある。地元企業に取り組みを知ってもらう努力も必要です。地元企業とのコラボレーションを進めれば、企業からの取り組みへの協力が得られるばかりでなく、就職支援にも繋がる可能性がある。</p>
川井	取り組みの活動の方向性が見えてきたように感じる。迫田先生の発表でのデータが興味深かった。学生はコミュニケーション力があると感じているのに、企業側から見ると学生のコミュニケーション力が不足するギャップは大切なポイントである。学生の議論する力、人に対応する力が弱まっているのではないかと感じる。それらの場面に尻込みする学生を後ろから押して、一歩でも前に踏み出させる取り組みが大事になっているのではないかと感じる。